

# 辰野五輪物語

【前編】1964年を振り返る

## ～市口政光氏のインタビューを通して～

今から55年前、東京で行われた世界的スポーツの祭典で、当時当社の社員であった市口政光氏がレスリンググレコローマンスタイル・バンダム級で金メダルを獲得した。再び東京での開催が1年後に迫った今、当時を市口氏の話と共に振り返ってみたい。

一幼少期からレスリングに出会うまで一

『私は体が小さいから、  
体が大きい人には全然勝てなかった  
ですね。』



市口 政光

レスリングはいつから始められましたか？

皆さんびっくりしますが、大学からです。

それまでは何かスポーツをされていたのですか？

子どもの頃、兄弟でも一番背が小さく、虚弱体質だったんですよ。小学生の頃は走るの早いけど、走ったら酸欠で、ひっくり返る始末。走るといっても、長距離はだめでしたね。

中学生の頃は、結核にかかりかけていたんですが、親が病院通いをしてくれて、1年ほどでなんとか元気になりました。そんなこんなで虚弱体質を改善すべく、何かスポーツをしたくて、中学生の時は野球をやってみたんですが途中で辞めちゃいました。

高校生の頃、兄が柔道を始めたので、自分も始めました。高校では毎日練習し、消防署・警察署にある柔道場にも、電車で30分程かけて週に1度行っていましたが、高校3年間1度もレギュラーになったことはなかったんです。私は体が小さいから、体の大きい人には全然勝てなかったですね。

### ＜国際大会実績＞

1940年	大阪府生まれ		
1960年	ローマオリンピック	グレコローマン7位 (5回戦敗退)	1962年 全米オープン選手権 グレコローマン優勝
1961年	世界選手権大会横浜	グレコローマン2回戦敗退	1964年 東京オリンピック グレコローマン優勝
1962年	世界大会	グレコローマン優勝	1968年 全米オープン選手権 フリー優勝
1962年	アジア大会	グレコローマン優勝	1968年 メキシコオリンピックコーチ
			1980年 ロスオリンピック監督

高校 2 年生の時に、柔道の昇段試験を受けな  
いかと聞かれ、初めての昇段試験を受けました。  
なんとか勝ち進み、初段をもらえましてね。今ま  
で負けてばかりだったので、それはもう嬉しかっ  
たですね。

高校 3 年生の最後の試合の時、顧問の先生が  
「おまえ、一生懸命頑張って練習しているから、  
一度大会に出てみる」と言ってくれて。初めて正  
式な試合に出場しました。結果は引き分け。結局、  
高校時代は実績ゼロで終わりましたね。

## —レスリングとの出会い、そして練習の日々— 『やっぱり、自分で創意工夫をする って大事だよ』

そこからどのようにしてレスリングと出会われたの  
ですか？

映画を観に行った時に、映画の前に流れるニュ  
ースで、水着を着て取っ組み合ってる人を見て  
「これいいなあ！」と思って。それがレスリング  
を初めて見た瞬間でした。調べてみると階級に分  
かれているスポーツで、今まで体格で負けていた  
僕にとってはいいな、面白そうだなと思ったね。

それで大学でレスリングをやろうと思って、大  
阪、東京といろいろ考えたけども、考えていた関  
東の大学はレスリングが強すぎて、初心者僕に  
はかなわないと思ってね、その後、縁あって関西  
大学に入学しました。

そこからの練習は創意工夫だったね。実家は鉄  
屋で、鉄くずがたくさんあるから、鉄を集めて自  
分で鉄アレイを作ったんですよ。自分で一生懸命  
作ったら一生懸命練習するもんなんですよ。他  
には、倉庫の屋根裏にロープをかけて、腕力を鍛  
える練習もしたね。海外の選手が棍棒みたいなも  
のを振り回して練習しているのを見た時は、これ  
はレスリングの練習にも活かせると思い立ち、材  
木屋の息子にお願いして、材木で棍棒を作っても  
らったりもしてね。

2 年間で経験者に追いつくぞという目標を立  
てて、自分で考えた練習を行いました。朝は腕の  
筋肉がカチンコチンになるまで練習して大学に  
行き、帰ってきてまた練習という毎日を繰り返し  
ていると、2 年間で体がガラッと変わりましたね。

**やっぱり、自分で創意工夫をするということ  
は大事だよ。**

モノや環境が整い揃っていたというより、市口さん  
自身で創意工夫をされたということですね。

そうですね。自分でやれるものはやろうと思い、  
創意工夫を重ねました。それが功を奏して、あっ  
という間に経験者に追いつきましたね。

大学 2 年生の頃には団体でレギュラーとして  
出場するようにもなりました。その頃は筋力をつ  
けるための本も読み、その通りに練習をしてみ  
たりしていましたよ。

部活で練習メニューがあったわけではなく、市口さ  
んご自身で考えられて練習を重ねられていたん  
ですね。

そうね。とはいえ、あくまで我流ではなく、何  
が必要なのかという情報を取り、自分の中で取捨  
選択をし、実践を重ねました。無心で練習を続け  
ていましたね。



【写真提供・産経新聞社】

それほどにレスリングがお好きだったんですか？

好きというよりは、負けたくないという気持ちが強かったね。大学4年間はあつという間。そこで何をするか。コーチが言ったことをこなすだけではなく、自分で創意工夫し、練習メニューを作って、何が弱いのか、人に聞いたりもして分析をする。そういう意欲は強かったね。

—1964年東京五輪にむけての日々—

**『出場したいという気持ちの一心。思うようにやらせて頂けて、本当にありがたいと思っていたね。』**

いつから五輪を意識されるようになったのですか？

全然しなかったですね。ただ勝ちたいという気持ちだけ。ローマオリンピックの代表になった時も（関西大学在学中）、お袋から電話が来て、「お前大変なことやったね」と言われ、オリンピック代表の件とは思ってもせず、何かしでかしたかとドキッとすると「お前、代表になったわよ」と電報が届いた旨を伝えられて。ひょっとしたら選ばれるかもという気持ちも頭の片隅にはありましたが、意識はしていなかったですね。

結局、ローマオリンピックでは7位。当時は入賞が6位までだったから入賞にはならなかったんだけどね。最終ソ連の選手との対戦で負けただけ、出場できただけで本当に嬉しかったね。

帰国されてからは次の東京五輪に向けて意識を向けられていたんですか？

いや、（続けるか、続けられるか）ずいぶん悩みましたよ。帰国後、先輩の紹介で、別の会社に入社しましたが、その会社は1年で潰れてしまっ

その後、就職先を探していた時に、先輩から、働きながら練習できる会社として辰野株式会社を紹介してもらったんだよ。

入社された時は、仕事とスポーツが両立できる環境だったんですね。

そうそう。東京本社の勤務で、午前中は先輩の営業に同行し勉強させてもらって。その時、辰野もオリンピックの関係の制服を作っていたので、そういう仕事も手伝ってましたよ。午前中は仕事、午後は練習という日々を送ってました。その頃はローマオリンピックに出場した後だったから、どの練習場でも私を受け入れてくれてね。関東のいろんな大学の練習場に行って、多くの選手と仲良くなりましたよ。応援もしてくれたし。最初は関西の訳の分からん者と見られて、名前も呼んでくれなかったけどね。

東京五輪を目指していた時に自分を奮い立たせたものは？

**出場したいという気持ちの一心。会社にも練習を認めてもらっていたし。思うようにやらせて頂けて、本当にありがたいと思っていたね。**

どんなときも周囲への感謝を忘れず、ひたむきに練習する市口氏の言葉が印象に残った。  
与えられるのを待つのではなく、自分の力で前へ進んでいくという姿勢は、誰もが見習うべき姿勢だと感じた。

無心で練習を続けてきた市口氏。その練習の成果は如何に…  
(後編に続く)

※後編は7/26(金)同ページにて配信予定です。

吉川 友理子=文